

統一思想から見た心情文化
清心神学大学院大学校
都賢燮 (Do Hyun-Sup)

目次

- I.序言
- II.文化の一般的理解
- III.統一思想の文化理解—心情文化
- IV.心情文化を創建する人間
- V.心情文化は未来社会の本質的姿
- VI.結語

I.序言

現代社会を文化の時代と通称するほど、文化は今日人間の生において、どの時より重要な主題である。文化が何かという問題は今まで頻繁に議論されてきたし、議論の活発さぐらい文化の定義に対する新しい問題らが提起された。これらは文化に対する既存の定義を直接的に批評し、あるいは他の表現や代案の学術用語を提示しながら、文化の定義を変えようとする形で進んできた。文化の定義と概念に対する論議は、一般的な現象から文化を正しく定義しようとする努力がより一層活発になっている。

文化の概念作ろうとする努力がずっと続いているという事実は、文化に対する普遍妥当な概念規定の困難さが、その概念を把握するのに使った方法が不十分なためというよりは、文化自体の多様性と文化の特殊な存在方式のような事態の複雑さからきているという点を見せている。これはいかなる現象や制度によっても、それ自体としては文化が何かを明確に認識するようにはできない。また具体的な現象も本質的に文化の概念が表わすことができる内容よりより多いものを要求するから、文化というものの総体性、すなわち概念的な形式の枠を超えている。

何らかの唯一の絶対的次元の文化のようなことを規定することは難しい。ただ数多くの事件とその表現、多数の遺産と指示、言語、行為、創作、規範、技術などに含まれている人間の知性と人間の世界変形の多様な形式だけがあるだけである。このように文化は人間の多様な行為と生産から生じながら、絶え間ない運動中にある暫定的な性格と行為の相関関係として、すなわち開かれた疎通の空間として存在する。

それなら統一思想は、文化をいかなる観点で照明し、それによりどのように概念を規定するのだろうか。世界内で人間により引き起こされたものや、人間を通じて産出されたものなどの総体として文化を見つめて理解しようとする伝統的議論から進んで、統一思想は文化が形成される基底とともに文化が進んでいく指向点まで、文化に関する論理の範囲を拡

張して扱っている。

統一思想は、人間を通じて文化が生じることができるのはまさに人間が心情を持った存在であり、創造性を持った存在であるためであり、それは人間が神様の心情と創造性を受け継いだためであると説明する。文化に対して照明してきた既存の見解とは違った観点から文化に対して接近する統一思想の接近は、文化の概念に対する規定だけでなく文化の根源および文化発展の理想を示す素地になるだろう。

II.文化の一般的理解

文化はその西洋的語源がラテン語の‘耕作’という単語から始まったように、‘自然’とは反対の‘人為から成り立ったこと’を示している。文化は持って生まれたそのままの本質の自然と対立するものであって、自然を人為的に磨きあげるところから出発する。文化は人間の知識に基づいた技術と、情緒に基づいた技巧を意味するが、前者を通じて文明を形成し、後者を通じて芸術を成し遂げるという点を考慮すれば、文化は人間が生活を通じて成し遂げる人為の総体であるといえよう。人間の総体的な生活方式または生活態度が、すなわち文化であるという理解はここで始まる。このように見るならば、人間がいかなる文化を成し遂げなければならないかという問題は、文化が生活方式という意味で、すなわち人間がいかなる方式で生きなければならないか、ということに対する問題であるといえることができる。

最近、文化に対する理解は人間が意識的に行うその全てのものが文化の枠の中に入ると見るようになった。食物、衣服、スポーツ、旅行、観光など身体と関連したものも皆文化の範疇に含まれている。それだけでなく、特定の人物や特定の階層だけが文化を生産して享有できるのではなく、人間ならば誰でも文化を生産して享有できる資格と権利があると見なされている。

人間が意識的に行うすべての活動を文化と表現することができるようになったことは、文化の概念が静的な概念から動的な概念に変化したことを意味する。オランダの哲学者 C. A. van Peursen は“文化は名詞でなく動詞である”という言葉で、このような意味のことを言った。文化が過去の歴史的遺物にだけあるのではなく、現実の中で他人と共に生きていく中で、共に考え、共に行動して、評価する人間のすべての努力に入っているということである。

今、文化の概念はその範囲がより一層拡大している。Edward B. Tyler は文化に対して“知識、信仰、芸術、法律、道徳、風俗など、社会の一員としての人間が獲得した能力と習慣の総体”と定義した。そして Melville J. Herskovits は、文化を“本質的に人々の生活方式 (a way of life) を表わす信念、態度、知識、禁止、価値、目標の総体を記述する構成物”と説明した。以上、述べたことを要約すれば、文化は人間が考えて感じて行動するところを組織化、体系化して、共有する思想、感情、価値、行動に関連した類型および人間に含まれた価値体系といえることができる。

文化に対する概念がこのように広範囲になったのは、文化が人間の社会生活全般にあまねくあることを知ることであり、文化というものが、人間の生の類型あるいは生活様式全体であるということに悟るようになったためである。結局、文化は時代と空間を横切って、人間の生の総和であるから時代性や地域性により相対的に多様な様相を帯びることになるのである。

一方、文化の概念と対応する関係から文明の概念が定義されている。文化と文明は、原始的に自然に対立しながら人間の活動を通じて、自然を積極的に、開発、形成して、人間的な満足を達成しようとする人間のすべての努力を示す。この時、自然は人間の外にある外部的自然だけを示すのではなく、人間の中のいわゆる内在的自然をも意味するから、文化と文明が対应的に区分される。すなわち、文化は土地を耕作するという本来の意味で、人間の内部的自然を人間の活動を通じて、目的によって開発して得られた結果をいう。これに対し文明は、共同体あるいは市民として、人間の外部的自然を分業化した社会生活の中で色々な目的達成のために産出してなし遂げた活動様式、いわゆる生活技術、生活条件、生活秩序を意味している。

Ⅲ. 統一思想の文化理解—心情文化

統一思想は人間のすべての活動の総和を文化として明らかにしている。人間のすべての活動は知的活動、情的活動、意的活動として総合されるが、人間がこのような活動を行うことができるのは心情を原動力としているからである。心情は静的な衝動力であるが、この衝動力が知的機能、情的機能、意的機能を不断に刺激することによって表われる活動がまさに知的活動、情的活動、意的活動である。人間は知的活動を通じて、哲学、科学をはじめとする多様な学問分野を発展させ、情的活動を通じて、絵画、音楽、建築などの芸術分野を成しとげ、知的活動を通じて、倫理、道徳、教育などの規範分野を発達させてきた。結局、このような学問分野、芸術分野、規範分野の総和がまさに文化である。ところで人間の知的、情的、意的活動の原動力が心情であるから、学問、芸術、規範分野の活動が皆心情を動機とし、愛の実現がその目標となる。したがって文化は心情を動機とし、愛の実現を目標にして成立するのであり、人間は人生を通じて行う諸活動を通じて、このような文化を成し遂げながら生きていくのであるが、統一思想はこのような文化を称して心情文化という。

一方、文化を成し遂げている人間の生の総和が知情意の三つの活動に大別されるのは、すでに述べたように、心情がそういう活動を可能にする原動力であるという事実に基づいている。心情は内的性相と内的形状からなる神様の性相の中で、その中でも特に内的性相よりさらに内的なものであるが、このような存在論的構造は人間の性相においても同じである。

内的性相は知情意の三つの心的機能のことを言うが、三つの機能は各々独立した機能でなく互いに関連している。知情意の三機能がこのように共通要素を持っているという事実を

理解する時、人間の現実世界でこれらに対応するそれぞれの価値の真美善の価値が互いに共通要素を持っているという点を理解でき、さらにこの三つに対応する学問、芸術、規範の3大文化領域が相互に共通要素を持っているという事実を理解することができる。このような命題は文化の創造と関連して、現実的に重要な意味をもっている。

今日、心情を動機として、愛の実現を目標にする心情文化が花を咲かせるためには知情意の三機能が正しく発揮され、それに対応する学問と芸術と規範の3大文化分野が発展するようになる時、初めて可能になるという事実を見せている。文化に対する統一思想の立場を代弁する心情文化は、今日、文化を発展させていくにあたり、その原理が指向するところを提示する重要な役割を果たすことができる。

IV. 心情文化を創建する人間

統一思想は、文化に対しその理想的な姿を心情文化であると断言しており、それに対する根拠は、文化が生じるための根本的な原動力がまさに神様の心情に似た人間の心情であるからだという。このような事実は、人間が文化を創建して発展させるためには、まず人間が理想的な心情の持ち主にならなければならないことを知らせている。神様の性相の核心が心情であるように、人間においては、心情は人格の核心になるのである。人格の完成はこのような神様の心情を体恤するときに可能である。神様の心情を体恤して、人間が人格を完成するようになれば、はじめて心情的存在となる。

人間が心情的存在であるという事実は、神様が心情を通じて、内的性相を全力投入して、創造をなしたように、人間もまた心情を通じて、知情意の三機能を発揮することによって文化を創建できるということを意味する。一方で‘愛を通じて喜ぼうという情的な衝動’という心情の定義から知ることが出来るように、人間は心情を持っているから他人や万物を愛そうという欲求を本能的に持つのである。神様の心情を体恤して心情的存在になれば、生活それ自体が愛の生活になる。すなわち人間が心情的存在という事実はまさに愛の生活をする存在であることを意味する。したがって人間は愛的人間(homo amans)となるのである。

心情的存在としての人間は、知情意の三機能がバランスよく発達しており、これを発揮して真善美の価値を追求するようになる。知は認識する能力として世界の事物と現象を探求しながら、道理を体得することによって真理の価値を追求し、情は感情を感じる能力として喜怒哀楽をはじめとする多様な感性を受け入れることによって、美の価値を追求し、意は意志を発現する能力であって、公明正大な判断と行動を行うことによって義に徹することの価値を追求する。結局哲学、芸術、倫理、政治、経済、スポーツなど人間が行うすべての行為は全部心情を動機として成り立つのであり、知情意の活動の産物である。

心情はこのように本来、文化活動の原動力であり、神様の心情を体恤した心情的存在の人間が文化活動の主役になる。人間は文化活動を通じて、色々な文物と社会制度を創造し、継承しながら、社会を維持、発展させる。これを通じてみる時、人間が文化活動の主体と

いう事実は、人間が心情を動機として、知情意の三機能を通じて、多種多様な文化を成し遂げる創造的存在であることを示している。

V. 心情文化は未来社会の本質的な姿

統一思想は近づく未来社会に対して、‘本来の人間によって建設される社会’であると明らかにしている。本来の人間は神様の心情と真の愛を体恤して、人格を完成した存在とすることができる。神様の心情を与えられた人間はしたがって神様の心情を深く体恤すればするほど、自身に内在している心情を呼び覚まして、その本来の素性を発現させることができるようになり、人格を完成した存在となる。人間の人格完成は、心情を中心として発達した知情意の機能に基づいて、人格が躍動することをいう。未来社会はこのように神様の心情を体恤して、人格を完成することによって、知情意の機能が調和的に発達した人間が集まって成立した社会であるといえることができる。

一方未来社会は真美善の価値が均衡するように実現された社会であるとも見られる。知情意の機能は各々真美善の価値を追求するのであり、このような価値の追求を通じて、真理と芸術と倫理が調和的に実現された社会である。真理が実現された社会は偽りが入り込むことができない真実社会を意味し、芸術が実現された社会は美があちこちで輝く社会を意味し、倫理社会は不便や、不当が存在しない正しい社会をいう。そしてこのような社会を成し遂げるための理論として、真実社会、美しい社会、正しい社会に対応して、教育論、芸術論、倫理論が要請される。

このように未来社会は真美善の価値が実現される社会であるだけでなく、科学の発達によって経済が高度な成長を成し遂げることによって、経済問題が解決された豊かな社会が成り立つのである。そして人々の生活は自身の価値追求欲を満たしながら、豊かな社会を通じて喜びを感じる生活を営むことになる。このような未来社会は、人間の尊厳と価値、自由と平等、そして人間の無限の潜在的創造力が政治、経済、社会、文化のすべての領域で最大限保障されて発揮されるのであり、これがすなわち心情を中心とした真美善の価値が実現された心情文化の社会であり、統一文化の社会である。

VI. 結論

人間のすべての行為は心情を原動力とする知情意の機能を経なくては成り立たない。したがって人間の生の全領域でなされる行為の総体は心情文化となる。

このような心情文化は人間の創造とも関連している。神は心情を動機として、創造目的を立てて、知情意の三機能を投入して、創造を始められた。神の創造行為は心情を動機としてなされる文化行為である。人間も同様に、心情に基づいて知情意の機能が発現することによって、文化を創る。人間の行う全てのものが創造行為であると同時に心情文化の活動になるのは、まさにこのためである。

心情は神様の性相の核心である。神様は創造目的を立てて、愛を通じて限りなく喜ぼうと

する心情を発現させる。その時、創造目的は神の心情を表わす形式であり、この形式は心情文化の原形となる。したがって文化は、よく言われるような人間の専有物ではない。人間は心情文化の原形になる神様の心情を体恤することによって、自身の心情を全うして、これを土台に知情意の機能を発揮して、思考と感情と意志を組織化、体系化する心情文化行為を行なう。心情文化は神様の心情と人間の心情が各々啓示され、表現される形式であって、神と人間が共有する思想、感情、価値、行動などを包括する、神様を中心とした文化である。

このように心情文化は決して停止している静的概念ではない。心情文化は、愛を通じて、たえず喜ぼうとする心情を基盤として知情意の機能が投入された、真美善の価値を絶えず創り出す躍動性に満ちた概念である。心情文化が広がって、真理、美、正義が普遍的価値として人類全体に共有されれば、はじめて神様の心情を中心とする心情文化世界が創建される。これこそ統一思想が心情文化の重要性を絶えず強調する主な理由である。

参考文献

南ヒョチャン、『木と森』ソウル:啓明社、2008。

崔ジョンナク、『未来の世界』ソウル:韓国経済新聞社、1994。

統一思想研究院、『統一思想要綱』ソウル:成和出版社、1994。

韓国哲学会編、『文化哲学』ソウル:哲学と現実社、1996。

C. A. van Peursen. *Culture in Stroomversnelling*. Leiden:Nijhoff, 1987. 『急変する流れの中の文化』カン・ヨンアン訳、ソウル:キョンムン社、1994。

Michael Landmann. *Philosophische Anthropologie*. Berlin,1969. 『哲学的人間学』ジン・キョフウン訳。ソウル:キョンムン社、1990。

Ralf Konersmann. 『文化哲学とは何か』ソウル:北コリア、14。

Charles H. Kraft. *Christianity in Culture*. N.Y.: Maryroll, 1979.

J. Tennekes. "An Inquiry into Methodological Principles of a Science of Culture." *Anthropology, Relativism and Method*. Assen: Van Gorcum, 1971.

キム・ヨングン『文化概念に対する哲学的考察』建国大学校大学院博士学位論文、1986。